

教職大学院

Newsletter No. 80

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2016.2.13

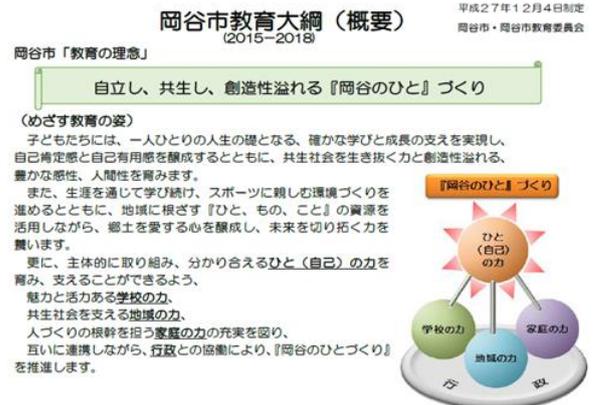
共に前へ

長野県岡谷市教育委員会 岡谷市校長会

「少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直す研究会（実践研究福井ラウンドテーブル）」の存在を知ったのは、福井大学教職大学院教授の松木健一先生に指導いただいている本市岡谷小学校の教師が、ラウンドテーブルに参加させていただいたことによります。「県内の研修会では聞くことができない全国レベルでの討議や情報交換が新鮮でした」「様々な校種（幼保・小・中・高・大学）・職種の方からいただいた多面的なアドバイス等がとても勉強になりました」「求めて参加される方々の熱き人となりふれられたことが自分の刺激になりました」等々…、参加し学び得たことを語る面々の顔が輝いていたことを記憶しています。また、ラウンドテーブルに参加した教師が、小グループで語り合う中から実効性のある手がかりをつかみ、子どもと共に学力向上のために授業改善を進めている姿を見るにつけ、「岡谷小学校以外の教師も参加するような計画が進められないのか」と教育委員会と校長会で検討してきました。

岡谷市は小学校8校、中学校4校がある人口5万人程の工業都市です。全国的に少子高齢化の傾向から学校の統廃合が話題になる昨今、本市では児童数の減少からではなく「軟弱な敷地が学校敷地に適さない」という安全に配慮しての極めて特殊な事情により小学校1校がこの3月をもって閉校することになっています。その学校が、岡谷市内はもとより諏訪地域にあって授業実践の牽引役を担ってきた岡谷小学校なのです。長く公開授業研究会を継続してきた実績、確かな学力保障と成長保障を図る授業改善を進めてきた伝統、子ども・教師共に学ぶ意欲に満ち溢れた校風等々を岡谷市の財産として、どのように生かしてつなぐのか…。児童が4月から通学することになる2つの小学校はもとより、他の市内全小中学校が新たな学校づくりに向け、それぞれの立場で検討してきています。

また、知識基盤社会に求められる教育を理解し授業改善を図る資質能力を高めながら、本年度策定となった「岡谷市教育大綱」の理念に基づき、市内全教職員が一丸となって、「生き抜く力と創造力、知的好奇心溢れる心豊かな人づくり」に向けた教育実践を進めていきたいと考えています。



そんな中で、今回ラウンドテーブルに本市より20数名が参加させていただくこととなりました。それぞれに授業改善に取り組んだ実践をもった参加です。多様で多面的な考えに触れ学びあう中で、おおいに刺激を受け、子ども達の伸びる芽を一層伸ばす手がかりをつかみ、現代的な教育課題に向かってくれるものと期待します。

（文責 岡谷市教育委員会教育支援主事 花岡ひさ江）

内容

- 巻頭言 (1)
- スタッフ紹介 (2)
- 冬の集中講座の報告 (3)
- スクールリーダー便り／院生からの報告 (6)
- 研究紹介 (10)
- ラウンドテーブルの案内 (13)
- 二宮先生の急逝の報に接して (19)

スタッフ・院生紹介



田中 治 たなか おさむ

8月7日付けでコーディネーターチャー（非常勤講師）としてお世話になっています田中治です。実際の勤務は10月17日の合同カンファランスがスタートで、11月の合同カンファランスと月1回ペースで参加させていただいておりましたが、今回12月23日～25日の冬期集中講座で初めて福井大学教職大学院の「実践と省察」を実感することができました。と言いますのは集中講座の初日、Newsletter担当の半原さんから自己紹介文の寄稿を依頼され、自分自身を省察せざるを得なくなったからです。そういう意味におきまして今回の集中講座は私にとって大変充実したものになったと感謝しております。

私は、教育実践を皆様に披露できるようなものは持ち合わせておりません。敢えて述べさせてもらうなら大学卒業後社会人となって39年余の間、現在まで勤務歴が16カ所に及ぶことです。その道一筋の方に言わせると「腰の軽いやつ」とお叱りを受けますが、短所を長所に置き換えてどのような環境にも適応できる順応性を併せ持っていると自負しています。このような言い訳をしたうえで自分のこれまでの人生を省察してみたいと思います。よろしくお付き合い願います。

「もしあの人に会わなかったら今の自分はなかった」と思う経験はどなたにもおありでしょう。私の場合もいくつかあります。その1つは、民間企業から教員への転職です。大学卒業段階では教職には全く関心がありませんでした。というより自分には教職は無理だろうと思っていました。そこで民間企業に就職したのですが、転職のきっかけとなったのはある方との出会いでした。その方はスケールが大きく、自分もいつかあのような人になりたいと思いました。ある日、その方から「デールカーネギーコース」を勧められ毎週土曜日3時間15回シリーズに参加しました。最初はギクシャクしていたメンバーも4、5回目からは自分の本音を語り合えるようになり、教育でこれほど変わるものかと驚かされました。この体験が人を育てる教職を目指すきっかけとなりました。

2つ目は教職7年目にナイロビ日本人学校教員への派遣を希望したことです。新婚旅行先で知り合った日本人の方に日本人学校の教員を強く勧められました。これまでの生活とは全く異なる世界への挑戦は、何物にも代えがたい緊張と不安と期待の入り混じったものでしたが、3年間のアフリカ生活を経験することにより人が住めるところならどこへでも行けるという大きな自信となりました。

この他にも4年間の社会教育主事、10年間に3回出入りした教育行政の経験を通して様々な人との出会いに恵まれ、それが私にとって大きな財産となりました。尊敬できる多くの方に巡り会えたことがなによりも幸せなことでした。

ところで、私と福井大学教職大学院との出会いは県教育庁嶺南教育事務所の研修課長時代でした。2007年の秋、福井大学から教職大学院設立の経緯と福井大学との地域拠点協定について説明に来られました。2008年4月の開設に向け行政機関における教職大学院のあり方等未知な点はありませんでしたが、私自身教職大学院に大変興味を持ったことを覚えています。理学部卒業の私は、できれば教育について体系的に学びたいという気持ちがありました。2008年入学者については1年履修でよいという点も魅力でした。入学希望者の人選が難航していた時、「私が大学院に入学してもいいですが」と所長に申し出ましたが、実現には至りませんでした。その後、嶺南教育事務所の次長、所長の任につき年2回の運営協議会への参加、嶺南教育事務所での合同カンファランス、ラウンドテーブルの参加を通して、福井大学教職大学院が年々バージョンアップし全国の教職大学院のモデルとして高く評価されていることを知り大変うれしく感じたものでした。

今回コーディネーターチャー（非常勤講師）という立場で福井大学教職大学院に関わらせていただくことができ大変うれしく思っています。院生の熱心な実践を傾聴することにより改めて自分自身の省察に結びつけたいと思います。

私ごとですが、この1月から17番目の職として学校教育に携わることとなりました。60代からのスタートですが教職大学院で学んでいる実践と省察のコミュニティーをキーワードに可能性に挑戦していきたいと思っています。

私市 聡美 きさいち さとみ



皆さま、はじめまして。2015年11月1日に教職大学院担当の事務補佐員となりました、私市聡美と申します。こちらでの勤務も4か月目に入りますが、毎日やりがいを感じつつ過ごしております。

2015年は私にとって特別な1年でした。というのも、それまで勤めていた会社を辞めたのを機に「いろんなことにチャレンジしてみよう」という気持ちが起こり、その結果、たくさんの人に出会い、たくさんの新しい経験ができた年だったからです。新たな人との出会いを通じて、自分の考え方が常識にとられすぎていることに気づいたり、自分がまわりからどう見られているのか知ることができたり、かわり映えのなかったそれまでの生活が一変した年でした。そんな変化に富んだ1年の最後に、教職大学院という新たな場所で働くチャンスを得て、飛び込んでまいりました。

教職大学院で働きだしてすぐの頃は、「ラウンドテーブル」や「カンファレンス」といった初めて耳にする言葉に戸惑いの連続でした。大学の事務手続きの方法も民間企業のそれとは異なり、なかなか慣れることができず、「これは大変なところに入ってしまった!!」と正直思いました。しかし、先生方、職員の方、院生の方、皆さまが忙しくても私の問いかけに真摯に答えてくださり、細やかに教えてくださるので、ほとんど不安を感じずに業務にあたってこられました。ありがとうございます。1日もはやく

日常業務に慣れて、教職大学院のメンバーとして、しっかり皆さまをサポートできるように努めたいと思います。

私が、教職大学院で開かれるカンファレンスに参加してから、よく思い浮かべる歌があります。それは、中島みゆきさんの「糸」という曲です。(実は、彼女のファンなのです。)結婚式ソングの定番でもあるので、1度は耳にしたことがあるかと思われます。その曲の中に次の歌詞があります。

縦の糸はあなた 横の糸は私
逢うべき糸に 出逢えることを
人は 仕合わせと呼びます

私は、この歌詞の中の「あなた」を、恋人や伴侶はもちろんのこと、恩師、先輩、同僚、友人など、今までに自分が出逢い、関わりをもった人全員と解釈しているのですが、教職大学院はまさに幸せな出逢いを生む場所だと感じました。年齢も専門分野も経験年数も異なる現役の先生方が、ご自分の学校ではない教職大学院という場所で、自分の活動を振り返ったり、心の葛藤を吐露したり、それをさまざまな先生方と共有することで心が軽くなり、さらに新たな何かが心に芽生えたり、…「糸」という歌がぴったりだと思えます。

私もこの4か月の間に教職大学院でたくさんのお出逢いを経験しましたが、さらなる出逢いと経験を楽しみに今後も自分のなすべきことに一生懸命取り組んでいきたいと思えます。どうぞよろしく申し上げます。

冬の集中講座の報告

冬季集中サイクルを終えて思うこと

高浜町立青郷小学校 砂原 亘

冬季集中サイクルを終え、今、もう少しで終わる長期実践研究報告書作成と、ずっと終わらない「学び」の道の途中に立っているような気分です。

冬季集中サイクルでは今までの教員生活を振り返り、そして、この2年間の学びを整理することができました。その中で、様々な発見があったことに驚いています。

まず、自分の学びの過程には自分以外のたくさんの方々がいらっやったということです。もちろん、自分の学びは自分の実践があつてこそですが、道に

迷ったり行き詰まったりした時に方向性を示してくださったのは、職員室の同僚はもちろんのこと、合同カンファレンスやラウンドテーブルなどで語り合った大学の先生方、他校の先生方、院生の方々でした。特に大学で出会った方々との語り合いについては、大学に入学するときに「大学院は温かいよ。いい気持ちで現場に戻れるよ。」とおっしゃってくださった先輩の言葉通りでした。なぜ「温かい」のか、それはみなさんが大学院で学びを深める「同僚」だからです。学校は違えども、大学院には「同僚性」

が生まれているのです。もう少しで卒業するのが本当に惜しい限りです。

次の発見は、記録を残すことの大切さです。大学院に入学する前の20数年の教員人生では、自分や自分以外の先生方の授業、他校での学びなどについて、こんなに記録を残したことがありませんでした。記録の多くは事実を書き留めたもので、なかなか自分の思考を記すに至りませんでした。自分や先生方の授業において子どもの様子(事実)を記録することで、子どもの見取りが少しはできるようになったようにも思います。長期実践報告書を作成するにあたり、これらの記録が今までの実践を整理し、大学院2年間の学びを支えてくれていることに気づきました。アウトプットの大切さを実感しています。また、記録したことを「編む」難しさも学びました。

最後に、理論は実践の後からついて来るといことです。このことは入学当初から大学院の先生方や先輩方に教えていただいたことですが、1年以上の間、その真意をつかめないうままにいました。私は大学院で自分の教員人生を振り返る中で、体験活動がしたいことを確認しました。また、本校に着任してから「協働」にも惹かれました。この2つが、実は自

分の教育の芯にあるもの、つまり「生きる力」を子どもたちに培うことなのだという考えに至ったのは、M2の夏季集中サイクル3です。それまではたくさん記録を残してはいるものの、自分が大学院で何を学んでいるのかがはっきりとしていませんでした。しかし、実践を重ね、それを綴っていく中でやっとこのテーマが見えてきました。これが「架橋理論」なのかと目から鱗が落ちた思いでした。大学の先生方や先輩方がおっしゃっていたのは本当だったのです(別に疑っていたわけではありません)。

これらの発見は、大学院に来させていただいてなかったらずっと分からないでいたかもしれません。教員人生も半分を切って少し経ちますが、大学院で学べてよかったなど、冬季集中サイクルを終えた今、しみじみと実感しています。

しかし、「学び」はまだまだ道半ばです。長期実践研究報告書が完成して一息ついたら、また次の実践が待っています。大学院で出会った方々に最大の感謝をしつつ、実践を重ねていきたいと思えます。2年間、本当にありがとうございました。

福井大学教育地域科学部附属中学校 幸坂 浩

12月23日から冬期集中講座が始まった。このサイクルの主たるねらいは、長期実践研究報告の作成である。このサイクルに入る1週間前に柳沢先生のもとを訪れ、きっちりしたデザインではなかったが、大筋のラフスケッチを見ていただいた。私は柳沢先生に説明するため、事前になぐり書き風のラフスケッチを描いてみた。書いているうちに、教師として自分が歩んできた道筋を、時間軸に沿って辿ってみようと考えた。

当初は、「コミュニティ」「協働探究の学びのサイクル」「教師の力量形成」「学校文化の継承と創造」など、自分の学びの経験から関心のあるキーワードをいくつか並べて、それらについての事実を繋いで書いてみようかと考えた。もっと正直に言うと、これまでいくつか蓄積された実践研究記録をそのまま並べて、新たな視点でちょっと省察を書き加えてページを埋めてしまおうか、などの甘い見通しを持っていた。実際に、今この原稿を書いている傍らには、未完成の長期実践研究報告が横たわっており、

最後はそれら記録に頼ってしまうかも…という誘惑と戦っている事実がある。

ラフスケッチをしていると、キーワードについての事実を取り出す作業が頭の中で行われる。例えば、コミュニティについて。勤務校である福井大学附属中では、「探究するコミュニティ」というテーマを設定し、10年以上継続して研究している。6年前に私は転任してきたのだが、その当時と今とでは、コミュニティの捉え方が少し変わってきている。6年前の実践から感じ取ったコミュニティの価値、変革点となったその後の実践の展開、そこから遡って前の学校やその前の勤務地での経験が繋がり、コミュニティの視点で改めて捉え直してみたとき、当時は気づけなかった価値が掘り起こされていく。そんな省察をしていると、長期実践研究報告は時間軸に沿った展開で、当時と今のとらえ方の違いや変化、繋がりを吟味し解明していく方が楽しい気がしたのである。

サイクル中の作業は、時間との闘いであった。当時の実践の再探究は、まず記憶の整理が必要だが、

限界がある。やはり、当時の実践記録が拠り所となる。その記録を紐解いていくと、当時のさまざまな事実が思い出されてくる。それらをどのように物語っていくのか、悩むのである。サイクルの始めに柳沢先生から、「うまくいかず、悶々とした場面の方が読み手には興味深い。そこでどう耐えたのか。どう次に活かされていったのか。展開を支える要となったことを徹底的に吟味するプロセスを、ここでは踏むことになる」という主旨の話をいただいた。また、コーディネーターの小嵐先生からは、「順調に進まなかったプロセスを捉え直すことで、自分が何

を大切にしてきたのかが凝縮され、今後の成長を予感する学びとなる」と助言された。体裁を取り繕うとしていた自分がいた。過去の記録と向き合い、当時と今の視点を行き来して何度も問い直す。時間をかけて繋がりを吟味する。悩みながらも、意味づけたり価値づけたりしていく。事実が捉え直され、編み直されていく。そんなプロセスを歩みながら、単に長期実践研究報告の仕上げのためだけでなく、その先の展開の発展的な可能性も展望する学びのサイクルであった。

嶺南教育事務所 藤本 純子

冬期集中講座の初めに、柳沢先生より長期実践研究報告の目的についてお話があった。「長い実践の展開を跡づけ、吟味し、価値を探る」こと、そして、M1の自分にとっては「跡づけを踏まえて、今後の展開の可能性を探る」ことが大切な課題だと自覚できた。

私は、今年度4月より嶺南教育事務所研修課に勤務している。同時期に教職大学院に入学した。それまでとは大きく異なる環境の中で、自分に何ができるのだろうか、これが本当に教育現場の先生方にとって有効な手立てなのだろうかということを、常に自分自身に問いかけてきたように思う。私にとっては、まだまだ「長期ではない」という思いと、一つ一つの実践が別々のものに見えるため編み直すことができるのだろうかという不安を抱えて、長期実践研究報告に取り組み始めた。

とにかく書き始めようと思い、これまで書き留めた記録などを実践ごとに時系列に並べてみた。そして、改めて振り返った。そこで気づいたことは、これまでの中学校、小学校勤務での経験が現在の嶺南教育事務所研修課での勤務につながっているということである。学級経営や教科指導、困り感を感じている児童への手立て等について、職場で周りの先生方に教えていただいたことや、ともに研究を進めてきたことが、その時点で終結しているのではなく、つながり、積み重なりながら現在の自分を作ってくれていると感じた。

そして、教職大学院の合同カンファレンスやラウンドテーブルで互いの実践を語り、自分の実践における悩みを聞いていただき、考えを交流することによって、自分の考えに変化が生まれていることにも

気づいた。夏期集中講座で『コミュニティー・オブ・プラクティス』を読み、語り合ったことも、これまでの自分の実践をとらえ直すよい機会となっていたと気づくこともできた。

実践を振り返りながらたどり着いたのは「つなぐ」「つながる」という言葉である。嶺南教育事務所研修課の一員として、研究員の研究をつなぐ。嶺南教育事務所において課をこえてつながる。実践型集合研修講座と訪問研修、通信型研修をつなぐ。教育現場の小・中学校と嶺南教育事務所がつながる。教育現場の小学校と小学校をつなぐ。教育現場の学校が校種を越えてつながる。これらのつながりの中で、さらに充実した研修を提案するというのが私の目指すところである。

少しだけ今後の展開の可能性を探ることができたような気持ちになれたのは、このように長期実践研究記録に取り組む時間と場を与えていただいたからだに感謝している。冬期集中講座の際に、同じグループのM2の先生が「編み直すという作業が非常に難しい。」とおっしゃっていた。私も、自分の長期実践研究報告を、断片的な行動や反応の記録・分析のままではないだろうかという思いで、今一度「編み直す」作業をしたい。

現在、来年度に向け、研修体制や教職員研修講座の枠や内容の見直し、実践型集合研修講座と訪問研修の実施方法の再検討等を行っている。嶺南地域の各学校の課題に応じた研修、各学校と共につくる研修を提案していきたいと考えている。各学校の先生方も、何より自分自身が「学び続ける教師」となれるよう、今後も実践と省察を重ねていきたい。

冬期集中講座に参加して 福井大学教育地域科学部附属中学校 田中 紗衣里

12月23日～25日、1月5日～7日の6日間、冬期集中講座に参加した。この冬期集中講座では、M2は修士論文にあたる長期実践報告書を書き進めていく。冬期集中講座が始まるまでに、長期実践報告書の柱やおおまかな構成は担当教員と相談していた。しかし、それを文章にしていこうとすると、なかなか書くことができずにいた。思いはあるのにそれが文章にならない。そんな不安と焦りを抱きながら、ほとんどゼロの状態でのこの集中講座を迎えてしまった。

6日間とも、進行状況とともに気づいたことや考えたことを語り合う時間が設けられていた。このカンファレンスの時間は、私にとって重要な時間だったと今振り返ってみて思う。あまり書き進めることができなかつたときは、「何を話したらいいのか…」と悩み、気が進まないこともあった。しかしグループの席に着き、話してみると、一日考えていただけあって、語ることはできるのである。自分が今どこまで書くことができ、これからどのようなことを書きたいと思っているのか、何が書けなくてパソコンを打つ手が止まっているのかを語りながら自分の中で整理し、改めて自分のことを振り返ることができた。また、聞いてもらうことで「この部分はもっと知りたい」「この部分が気になったんだけど」と客観的なアドバイスがもらえたことは書き進めるにあたって非常に参考になった。

私は、「家庭科って何だろう？」を考えつづけた

2年間として、長期実践報告書にまとめようと考えていた。そこで、前半(12月)の集中講座では、自分が家庭科について考えていたことを話させてもらった。私は家庭科を「どのような自分になりたいか」を考え、その目標に向かって生活していく姿勢を身につける教科であると考えていた。その話を聞いて下さった同じグループの先生が「どんな自分になりたいかっていうのは、生徒はどんな理想をもったらいいんだろう?って思っただけ。」と話を聞いていて気になったことを教えて下さった。その言葉を聞いたことで私は、この家庭科を学ぶ意義は自分のためのものであって、生徒にとっての家庭科を学ぶ意義はもしかしたら違うところにあるのかもしれないと考えるようになった。自分の文脈の中でしか考えられていなかったことが、話を聞いてもらったことで新たな視点で考え直すことができた。私にとってカンファレンスの時間は書き進める原動力となっていた。

6日間の冬期集中講座で、これまで逃げてきた書くという一歩を踏み出せたことは非常に大きかった。苦しみながらも書き、語り、聴くというプロセスを繰り返しながら今までの自分と向き合うことで、自分が考えていることや思いの根底にあるものが少しずつ明確になっていったような気がする。最初の構想段階よりも何倍も考えを深めることができた、価値ある時間であった。

スクールリーダー便り

福井大学教育地域科学部附属中学校 佐藤 恵美

福井大学教育地域科学部附属中学校では、現在、第IX期研究主題「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》」4年次サブテーマ“個の学びの深まりを生み出すコミュニティの学びをデザインする”のもと、研究を進めています。

4年次サブテーマのキーワードは、“コミュニティの成長”と“個の学びの深まり”です。これまで、1年次「省察を捉え直し、次なる学びに生かす」、2年次「協働の学びの場を問い直し、学びの繰り上がりを生み出す」、3年次「個の学びの推進力を高める、協働探究をデザインする」をサブテーマとし、「主題—探究—表現」型の学習を構成する「発意—構想—構築

—遂行・表現—省察」の探究サイクルの過程を問い直してきました。探究サイクルを問い直してきたことで、一人一人の学びを高めるためのコミュニティになっているのか、コミュニティが成長していく中で、どのように学びが深まっていくのかなど、どのようなコミュニティを形成していけばよいのかを問い直す必要性が生まれてきました。子どもたち自身がコミュニティのよさを実感し、自分たちでコミュニティを成長させる学びを求めていくことが、一人一人の深い学びにつながっていくのではないかと、日々の授業実践をもとに協働研究を続けています。

“コミュニティの成長”という、学校文化とのつながりが大変深いと感じます。子どもたちの「探究するコミュニティ」における学びは、教科の学習だけでなく、学年プロジェクト、学校行事など、校内の様々な活動でもつながる学びとして展開しています。また、先輩の姿を見て、先輩たちよりも、よりよいものを創り上げていきたいという思いが基盤となって、学校文化が継承されてきています。

「学年プロジェクト」とは、本校における総合的な学習の時間における活動で3年間のロングスパンな子どもたちの協働探究として計画されています。社会とのかかわり、自己の生き方を考えるテーマを学年ごとに設定し、3年間を通したロングスパンの探究活動によって主体的・創造的によりよく問題を解決する姿を目指しています。学年によってテーマは異なりますが、その中で目指す子どもたちの姿や3年間の活動の中で培っていききたいことは共通しています。そして、常に表現活動を視野に入れた協働的な学習を展開し、スパイラル的に課題や探究を変容させながら学校文化の一翼を担っています。

現3年生は、『笑い』をテーマとして、「パフォーマーと裏方」「笑いと言療」「おもてなし」などについて調査したり、実際に自分達で「落語」「漫才」「コント」「喜劇」などを創作し、劇場を企画・運営して校内や地域で発表したりしてきました。その中で「表現すること」「笑いの効果」などについて振り返りながら学んできたことを捉え直しながら学習活動を進めてきました。さらに、これまでの学びを発信するために、修学旅行先の東京で、都内の小中学校や老人ホーム、福井アンテナショップなどの各会場を設定し、落語や漫才、コント、喜劇などをもとにした「笑Time 劇場」を開催し、多くの人と交流することができました。『笑い』を探究していくなかで、相手のことを考えた笑いや笑いを通して人とのコミュニケーションの大切さに気づき、仲間とともに活動を振り返りながら、課題を見つけ、さらによいものをめざしていく。その課程には、子どもたち一人一人の成長とともに“コミュニティの成長”も大きく感じられました。

学年プロジェクトの活動では、協働探究について、子どもたちの活動や成長から、学ぶ機会が多くありま



す。中でも、学年全体での話し合いの場では、一つの事を決定していくまでに、学年全体で話し合い、話し合いの過程を全員が知りながら活動していくことで、新しいものが生み出されていきます。私が特に鮮明に覚えているのが、赴任して最初に所属した2年生初めての学年集会です。実行委員を中心に話し合いが始まったのですが、最初に実行委員長が「みんなで話し合いの流れも共有したいので、学年全体で行いたい。」と話し、当たり前のように120人での話し合いが始まりました。それまで、学年全体での話し合いなど見たことがなく、「附属中の子だからできるのだろう」と思いましたが、今思えば、1年生の時から、実行委員を中心に自分達で考え、話し合っって合意形成していく経験を積んでいるからこそできること。仲間と協力して活動する経験を積み重ねてきたことの延長だったのだと実感できます。学年プロジェクトを通して大きく成長していく子どもたちの姿を見てみると、学年プロジェクトのしくみや役割の大きさを実感するとともに、これまでの先生方の本校での研究の奥深さを強く感じます。

今年の8月に本校で、三県附中交歓会が



行われました。毎年、富大附属中、金大附属中と福大附属中とで、リーダーを中心にお互いの学校の取り組みを紹介し合ったりしながら交流をしています。その交歓会に出席した子どもの一人が、学校行事や学年プロジェクトの取り組みを紹介したところ、「授業や行事や学年プロジェクトなどで、生徒主体で活動を進められることがすごいと思った。授業などでの探究だけでなく、学年プロジェクトのようなやわらかい探究活動がうらやましい。」と他校の子どもたちから良さを認められ、当たり前のようにしてきたことが、大変価値のあるものだと思えたことと話してくれました。その話を聞いて、さらに子どもたちが発信する機会を増やしたり、いろんな学校の生徒達と交流する場を増やしたりして、子どもたちが自分たちの活動を改めて捉えたり、良さを実感していけるとよいのではないかと思います。

子どもたちの“コミュニティの成長”と“個の学びの深まり”を見つめながら、先生方とのコミュニティも成長させ、子どもの良さを最大限に引き出していけるよう、これからも学び続けていきたいと思えます。

福井大学教育地域科学部附属中学校 Mangulabnan, Pauline Anne Therese M

今日は附属中学校で D 部会の提案授業である理科の授業公開に参加させていただいた。リトアニア人のアンドリューさんもその授業を参観しに来た。福井県内の他の理科の先生も附属中学校に来て下さった。皆さん、特に授業者の横山先生、どうもありがとうございます。



授業公開は物理についてで、大きなテーマが「力の不思議な現象を探ろう」であった。生徒たちはペットボトルと風船と水で力の規則性を実験して、色々な力の性質を解明してみた。生徒は遊ぶように実験して、浮沈子の仕組みを習得した。そして、一緒に行動しながら、各班の中でメンバーが一人一つずつやりたいことと追究したいことを実現していった！その際生徒が自分のワークシートに発見した考えを書くことで、個の学びや、コミュニティ学習や探究学習が良いバランスで実現されていた。最初に先生が前時の振り返りをして、生徒に「水圧」

「重力」, 「浮力」, 「沈力」, 「空気圧」と前時の実験の結果を思い出させていた。生徒は本時間の検証の中でその言葉の関係に気が付いていった。とても良い支援になっていたと思う。別の良かった点は風船を使用したことである。そのことで空気圧がもっと明確になった。ある生徒が始まった



ときに風船を見て「カッコイイ」, 「あれ！なぜ試験管を沈めると風船が試験管に入るのか」, 「凄い」と感想を述べていた。活動中、横山先生はグループを巡回して、グループのやることが科学的になるようにと支援的な発言をしていく。素晴らしい！残念ながら、時間が無くなって練り上げができなかったが個人の発見したことが書けた。記録と省察のために、



そうやって書くことは必要で大切だと思います。なぜなら、練り上げは次の時間にもできるので。

授業の後で、観察した理科の先生達は生徒の学んだことと学習活動について話し合った。先生たちの多様な視点と感想を聞くのは面白かった。理科の授業なのに、私は大体理解できて、とても勉強になった。最後に教職大学院の小林先生が、生徒が深く考えられるようにオーラルコミュニケーションの重要性を教えてくださいました。時間が足りなかったのでグループの答えをホワイトボードに書くことにしたあるグループの生徒が、グループで相談していない答えを書いた。それは悪いことではないが学びがもっと深くなるようにみんなのオーラルコミュニケーション力を高めたほうが良いとのことだった。私は次の授業の練り上げの後に、生徒に自分の元の思考を書いてもらって、他のグループの発表や全体共有の考えと比較させたり、その状況を振り返らせたりする方がいかなと思います。

今日は本当に楽しくて勉強になりました。もう一回、この授業から習えるように中学生になりたい。

大学院修了を前にして

大した思いもたず入学して、はや2年。入学とともに課せられた研究推進。やればやるほど分からなくなり、山積みされた資料や課題に追まわられる日々。それでも、毎月の合同カンファレンスで、

坂井市立春江小学校 山田 俊行

いろいろな先生方と語り合い、悩みを共有し、疑問が解消された時に感じた心地よさ。同じ勤務校ではないのに感じた連帯感。この感覚を、勤務校の先生たちに感じてもらえたら協働に近付くかも・・・!?

それまで耳にしたことはあれども、真剣に考えなかった「協働」の二文字。大学院に入学して初めて考え、この2年間いつでも私の頭の片隅に居座っている「協働とは何？」・「学校文化とは何？」という疑問。それを追究するため、勤務校では、指定を受けた道徳教育の研究推進に邁進してきた。次々と沸き起こる疑問や不安と格闘した2年であった。しかし、あわてずにじっくりと、間違った自信を見つめ直し、「子どもにとっても教師にとっても楽しい学校づくり」をめざしてきたつもりである。「道徳教育」を研究の中核にすえ、道徳の授業については、「子どもの思いを引き出す表現活動の工夫」を研究の柱として、「話し合い」「書く活動」「役割演技」などの工夫に取り組んできた。また、道徳の授業を充実させるためには、授業研究会の充実が必要と考え、授業研究の流れ、授業研究会のもち方について模索してきた。協働して研究を進めるためには、組織体制の整備以外に、意欲や熱意といったモチベーションが継続しなければ、その内容は充実しないと考え、授業者の思いを大切にしたい授業研究会、関係者全員が“満足感”を得られる研究会をねらった。

正直なところ、入学当初の疑問に対する答えは見つかっていない。おぼろげな形は見えてきてはいるものの、未だ実感できていない自分がある。

「学習する組織」の前書きに『組織づくりの課題は大きな問題である。とりわけ、なぜ理念を掲げながら、組織の多くの行動や現実が理念から離れているのかに目を向けなければならない。これは簡単な課題ではなく、一朝一夕には解決しない。「学習する組織」づくりは長い年月に及ぶ実践の積み重ねが必要であり、しばしば職業人生をかけることになる。』とある。「協働する組織づくり」も同じである。長い年月が必要である。たかが2年間追い求めたくらいで手に入る協働ならば、学校文化ならば、疾うに手に入っているはずである。

しかし、追い求めなければ近づけはしまい。たかが2年間、されど2年間である。この2年間で手に入れたものは、私にとって、とてつもなく大きなものだと感じている。それを生かすか、つぶすかは今後の自分次第である。正直なところ、私にとって、大学院という存在が研究推進の原動力になっていたところは否めない。修了後、その原動力を自ら奮い起こせるか、不安はある。しかし、子どもにとって何が大切か、そのために、自分には何ができるのかを考えながら、歩みを続けたい。「私の学校は協働しています。」と胸を張って言い切れるような組織づくりを目指していきたい。

大学院生としての学びは終わるが、私の協働への道は、まだまだ続く。

インターンシップ/週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース 1年 松山 琴美

新しい年になり、1年目のインターンも残すところあと2ヶ月を切りました。外の景色は年末とは一変し、少しですが積雪が見られるようになりました。また節目にあたって、次年度に向けて今までの出来事を振り返っていく機会も増えてきました。その振り返りの一部をここでは書いていきたいと思います。

私は、インターン校の至民中学校では2年生に所属させていただいています。2年生にとってこの年明けは3年生0学期の始まりでもあり高校受験にむけて本格的に準備をしていく節目でもあります。また、学年の行事の中で重要な立志式も2月24日に控えており、その準備も始まります。立志式は、福井の偉人橋本左内が数え年で15歳のときに自分の志を書いた啓発録の中の「立志」（志を立てること）に由来しています。至民中学校では自分の立てた3つの志を原稿用紙2枚以上の啓発録に書き、立志式で学年

の歌とともに発表します。立志式の準備を通して、私は、教師の待つ姿勢の大切さ、根気強く生徒と向き合う姿勢の大切さを痛感しています。冬休みの宿題で、生徒たちは、理想の大人や将来就職したい職業に就くために何をしていけばいいのかを箇条書きで書いてきていました。それをもとに原稿用紙に啓発録の下書きを書く最初の授業のときのことです。他の生徒が下書きを書きあげる中、このみだけは困った顔で原稿用紙を見つめていました。このみは勉強が苦手ですが、笑顔が絶えず、積極的に行事に参加するなど活発な一面もある生徒です。しかし、この時ばかりは表情が曇りがちでした。しばらくすると、私を呼び止めて、先生、将来の夢がないから原稿が書けないと言いました。その言葉通りこのみの冬休みの宿題や下書きの原稿用紙は白紙でした。言葉にはしませんでした。視線では啓発録に書く内

容を先生（私が）考えて教えてほしいと訴えています。私は、このみが自分の力で内容を考えることができるようにしたいと考え、このみの理想とする大人とは何か、今直したい癖はあるかなど考えるためのヒントとなることを順に尋ねていきました。このみは暫く悩んだ後に小さな声で天才的な大人になりたい、天才＝勉強やスポーツができることだと質問の答えを考えて白紙だった冬休みの宿題の紙に箇条書きで書き出し始めました。書き終わったこのみの表情を見てみると、達成感で溢れていました。時間が押ししているとつい口を出してしまいそうになりますが、根気強く待ち、できるまで生徒にとことん関わっていくことが生徒の自己有用感や成長につながるということを実感しました。

福井大学教職大学院の院生は毎週木曜日に大学に集まりカンファレンスを開いています。午前中には1週間のインターン校での学びの振り返り、午後には教育の諸課題についてなど様々なことを語り合い、議論をして学びを深めています。インターン中は日々起こることに対応していくことにいっぱいなかなか省察をする心のゆとりがないので木曜日のこの時間はゆっくりと自分の取り組みについて振り返ることができるので、ありがたいと思っています。授業実践のことや生徒との関わりなど悩みながらも実践したことについて語る時、頭の中で整理できてないことや緊張してしまうこともあり、とても拙くなってしまいます。しかし、先生方や他の院生の

皆さんは拙い話でも真剣に聞いて下さるのでありがたいと思っています。自分の語りだけでなく、他の院生の上手な語りを聞く度にもっと語り上手になりたいと思うばかりです。語った実践を価値づけ、ときには違った視点からの意見やアドバイスをいただくことで、自分の視野が広がり、自分が見えていなかった生徒の思いや実践の意義に気付くことができ次の実践に生かすことができます。

4月のニューズレターでは、生徒たちが主体的に学習する授業や何事も挑戦していくことを大切にしていきたいと書きました。主体的に学習すると抽象的な表現だったものが、インターンをしている中で、主体的に学習する授業が自分も生徒も面白いと感じる、楽しいと思えるような授業だということがだんだんと分かってきました。曖昧だった自身の社会科の教科観も「現代社会と教材を繋ぐ社会の面白さが分かる授業」というように固まってきました。また、自分の中で、将来の生徒の成長像を見据えたいうえで今どの支援が必要なのか、という視点がなかなか持てていなかったという課題も見えてきました。今後のインターンでは、この教科観に基づいた授業づくりや将来の生徒への願いのために今できる支援は何なのかという視点をもって行動していきたいと考えています。新学年まで残り僅かな時間ではありますが、子どもたちのよりよい成長のために今自分ができる支援は何なのかを考え一日一日行動していきたいです。

研究紹介

「実践のプロセスを協働で振り返るー語る・聴くから省察へー」

日本語教師達のラウンドテーブル in 北京

福井大学教職大学院 半原 芳子

近年グローバル化の進行に伴い日本語を学習する人たちが増加しています。少し前まではビジネスパーソンや留学生が主な学習者でしたが、1989年の「出入国管理及び難民認定法」の改定で日系人の受け入れ手続きの簡素化や在留資格が拡大されたことにより、多くの外国人たちが様々な目的で来日するようになりました。以来多様なニーズを持つ日本語学習

者に対しどのような教育を行っていくかが議論されるようになり、以前は通用したかもしれない「ある一つのアプローチ（教え方）で教えること」が難しくなっていました。それに伴い教え方や技法を習うのではない新たな日本語教師研修のあり方が必要とされるようになり、国内だけではなく海外でもその必要性が認識されるようになりました。そうした

動向を受け、今回世界で最も日本語学習者が多い中国（北京）で日本語教師達のラウンドテーブルを開催する運びとなりました。



この日本語教師達のラウンドテーブルは2008年に当時成人学

習・生涯学習に興味・関心を持っていた有志らで取り組み始めたもので、以来定期的に「実践のプロセスを協働でふり返るー語る・聴くから省察へー」と称して開催しています。私は初回から報告者やファシリテーターとして参加しています。

記念すべき海外初となるこの日本語教師達のラウンドテーブルは2015年12月19日（土）、北京外国語大学・北京日本学研究センターで行われました。当日は北京日本学研究センターの中国人院生（修士課程・博士課程）12名、北京および北京近郊で日本

語教育や交流活動にかかわっている日本人20名、そして日本から私を含む日本人6名の計38名が参加しました。北京日本学研究センターの朱桂栄先生の「じっくり・ゆっくり・たっぷり」を合い言葉に、現在チャレンジしていること、直面している課題や困難、実践を継続していくなかで出てきたことなどを、時間をかけて丁寧にふり返り共有していきました。今回北京で活躍する20代の若い日本人の先生方が多く参加・報告くださり、彼ら・彼女たちが海外で奮闘している姿に励まされました。また日本語教師でもある中国人の院生からは、最近試験でいい点をとるよりも自分の楽しみ（例えば「サブカルチャー」への興味など）から日本語を勉強する学生が増え、教え方をどう工夫・調整したらよいか悩んでいるといった日中共通の悩みも聞かれました。

海外にも広がりを見せつつあるこの日本語教師達のラウンドテーブルは今年で8年目に入り回を重ねる毎に参加者も増えています。より一層の学習の深まりと重なりを目指しそろそろ次の段階に進む時期に来ているのかもしれない。

海外の教員留学生と共に学ぶ

福井大学教職大学院 宮下 哲・半原 芳子

1 はじめに

先日、本教職大学院を訪問された他大学の先生が「日本語のできない留学生も他の院生と同様に、拠点校において実践・省察・再構成のサイクルで学んでいること」「英語での特別なプログラムではなく、互いの実践について英語と日本語の両方を駆使しながら語り合い聴き合って、省察を深めること」等に触れて、「そんなことが出来るのですね」と驚いておられた。

修士1年目を終えようとしているPaulineさん（フィリピン）も、教員研修留学生として1年半の研修を行っているSamahaさん（エジプト）、Maraさん（インドネシア）、Andrewさん（リトアニア）も、ほとんど日本語を習得していない状態で福井での学修を始めたのだが、言語の違いを超えた学びを得ておられるように思う。その要件はいくつかあるのだろうが、最も大きいのは「具体的な実践を共有した上で行わ

れる省察の積み重ね」ではないかと思う。

洋の東西を問わず、目の前で学ぶ子どもの姿とそれを支える教師の生の姿に接すると、各自が前提としている物事を問い直さずにはいられなくなる。あるいは、目の前の実践に触発されると、自国の現状を鑑みながら、帰国後に取り組む展望や可能性を探らざるを得なくなる。また、その挑戦的な取組を実現するための覚悟をもたざるを得なくなる。さらに、そのような取組を継続する内に、語られる内容には言葉や習慣などの差を超えた共通項が多いことに気付くようになると、困難に立ち向かうための勇気が湧いてくるからだと思う。

こうしたことは、留学生のみならず彼らの実践を支える私たち自身にとっても同様である。同じ実践に対して、少しずつ異なる視点や経験をもとに光を当て合うことで、その実態をより立体的に捉えることができ、私たち自身の思い込みがほぐされ、新た

な展望を拓く勇気が湧いてくる。

ここでは、留学生やそれを支えている（支える機会をいただいている）者が、どのような実感をもってどのように学習を進めているのか、その一端を紹介したい。

2 言語や習慣，教科や領域を超え相互に学び合う Exchange Meeting

昨年度の秋，来日した Pauline さんを教職大学院のスタッフみんなで支えることになった。その取組の1つとして，小林真由美先生と私の2人（Paulineさんが算数・数学教育の実践をお持ちであったことから，算数・数学教育に携わってきた者として）が定期的な勉強会を開催することになった。勉強会は，福井県内外の算数・数学の教育実践を共有して授業研究会を行ったり具体的な教材研究を行ったりするところからスタートしたが，現在は教科や領域に関わらずに，毎週金曜日の朝の附属小・中学校の様々な教科・領域の授業を参観した後，1～1.5時間程度の授業研究を行う会として位置づいている。当初は，同教科や領域であれば共有のためのハードルが下がるだろうと思っていたが，回を重ねる内に「具体的な実践があれば教科や領域の違いは問題にならない」と実感したからだ。メンバーも，Samahaさん Maraさん Andrewさんをはじめ本学の留学生数名の参加を得て，さらに国際色豊かに行われている。用いる言語は英語を主体としながら日本語も交えて行われているが，相互に理解している・・・と思われる。

授業参観後のMeetingでは，授業についての所感を語り合うとともに，その所感や問いそのものについての熱い議論が展開される。例えば，グループワークを取り入れることと本時のねらいとのかかわりが議論された際は，具体的な授業場面や子どもの姿に基づいて，

- ・グループワークやペアでの語り合いという手段が目的化していないか
- ・いわゆるHow-toが幅を利かせ，目的や子どもの必要感に基づいていないのではないか
- ・遅れがちな生徒がペアやグループで教えられることで伸びる場合もあるが，確かな力の定着が阻害されることもある，その見極めと形性的な評価をどうするのか

など，私たちが日本の教育の中で議論していることと同様の課題に焦点が当てられ熱く語られた。その改善に向けたアイデアを語り合う場面でも，多様な手順や方法が提案されつつ，それが学校の中で実践されるために必要なことは何かとか，管理職・行政の一員・大学教員として・・・どのような取組ができ

そうなのかが語られていた。

言語や文化，互いの思考や判断など様々な物事が交流するこの勉強会の後は，それぞれの所感をレポートにまとめることになっている。今日の授業をどうとらえたのかだけでなく，研究会での議論をどのように受止めたのかが記される。3月の勉強会では，これまでに記録した各自のレポートを資料として，この間の取組を通して，参加者の思考がどのように変容したのか，見出した共通点は何か，今後さらに検討すべきことは何か・・・について振り返ることになっている。英語も日本語も混ざった資料群をもとにした省察の中から，きっと今後の展開の方向性や勇気の芽が見えてくるに違いないと予感している。

月間カンファレンス

月間カンファレンスでも言語や習慣，教科や領域を超えた相互の学び合いが実現されている。カンファレンスでは校種をまたいで，スクールリーダー養成コースの院生の先生達と教職専門性開発コースのストレートマスターの院生達そして我々スタッフとで小グループになり，実践を語り，聴き，意味づけを行っている。フィリピンの数学教員であり管理職経験もあるPaulineさんからはフィリピンで取り組んできた課題探究型の数学の授業や校長としてのマネジメント経験が報告される。さらにはそこからメンバー間で日本とフィリピンでの共通の課題が捉えられ，授業研究，教師教育，管理職研修等が国際的にどうあったら良いかという問いへと進む。Paulineさんを交えた月間カンファレンスは，より良い教育実践を志している者達が国を越え，同じ実践者として互いの長い歩みを共有し，国際的な視座から新たな実践研究を展望していくことに挑戦している場だと言えよう。また，月間カンファレンスとは別に，Paulineさんおよび上記の教員研修留学生とスタッフとで定期的に「カンファレンス in English」を開催している。そこでは留学生が自分のこれまでの長期に渡る実践を英語でじっくりと語り，その展開を捉えていくことにチャレンジしている。

3 今後に向けて

グローバル化に伴い，モノ・人・コトが国境を越え縦横無尽に往き来し合う世界へと突入し，私達はかつてない複雑で困難な状況に遭遇している。その中でどのような教育を展望していくかは今や世界共通の課題であり，教員が国や言葉や（教育）文化の壁を越え，広くネットワークをつくりながら協働し，新しい教育のあり方を共に模索していく段階にある。現在，福井大学教職大学院ではいくつかの国際的プ

プロジェクトも動き出している。今後も海外の教員のみなさんとの学び合いを楽しみ、前進したい。

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2016 spring sessions

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館) ・ 共用講義棟 ・ アカデミーホール / AOSSA

2/26 Fri. 17:30-18:40

2/27 Sat. 13:00-17:40

Session 0 シンポジウム 9:40-11:20 「学び舎」として学校をリ・デザインする

- 〈シンポジスト〉 ハリー・ダニエルズ 氏 (オックスフォード大学 教授)
 〈コメンテーター〉 無藤 隆 (白梅学園大学 教授)
 〈コーディネーター〉 岸野 麻衣 (福井大学教職大学院 准教授)

Zone A 学校 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ—校種を超えて教育を協働する

いま、教育をめぐる現状は目まぐるしく変貌しています。新しい学習指導要領では、急速なグローバル化と情報化、そして超高齢化する 2030 年の社会を見据えた教育のあり方が議論され、アクティブラーニングを始めとした新たな方法の必要性が叫ばれています。たしかに、これからの社会で生きる子どもたちに対して、私たちのこれまでの価値観や経験をそのまま教えていくことができないのは明らかです。しかし正直なところ、これからの学校教育において私たちは何をどうすれば良いのか、雲をつかむような手応えの中で焦りと不安ばかりが募るのも事実ではないでしょうか。

私たちの誰も経験したことがない教育を求められる今の学校現場では、教師一人の力で全てに対応することに限界があります。であれば、他者と一緒に考えていくしかありません。これまで Zone A が「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマとしてきた理由は、まさにここにあります。そして、継続したセッションの積み重ねを経て、教師同士が語り合い、聴き合い、ビジョンを共有して実践する、協働の重要性が浮かび上がってきました。不透明な社会を生きる子どもたちを支える教師にとって、言わば「協働する教育」こそが、その根幹をなすあり方ではないかということが、おぼろげに見えてきたわけです。

一方で、これまでのセッションでは、同じ学校内の教師コミュニティに着目するあまり、協働を横のつながりとして限られた時間軸の中でのみ捉えがちでした。そのため、校種を超えた、より広い時間軸の中で協働を捉える視点はこれまで欠けていたように思います。しかしながら、2030 年の社会に生きる子どもたちへの学びを考えていく上では、子どもたちの発達をより広い枠組みから考え、言わば縦のつ

なから教師コミュニティの協働を検討していくことは必要不可欠です。将来を見据えた時、私たち教師は今どうい^ン市民を育てているのか、そうした子どもたちの長期的なビジョンを教師コミュニティで共有することが求められるからです。

そこで、今回のラウンドテーブルでは「校種を超えて教育を協働する」というサブテーマを掲げ、これからの日本社会を生きる子どもたちを育てていく上で、校種間の協働によって何ができるのかを話し合っていきたいと考えています。昨今の教育改革においては、校種間のつながりは大学進学を目的としたものとして、また、協働というキーワードは生徒同士学びを意味するものとして、それぞれ捉えられてきたように思います。しかし、校種の違いを超えて教育を考えていくことは、狭義の連携や協働を超えた実践的意義を、2030年を見据えた教育のあり方を、そして焦りと不安の中にいる私たち教師への一つの指針を、教師コミュニティにもたらししてくれるのではないかと考えています。ラウンドテーブルを通して、「校種を超えて教育を協働する」この可能性について皆さんと深めていくことができると考えています。

Orientation 13:00-13:10

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

福井県内外の保育所・幼稚園・小学校・中学校・高校・特別支援学校等から、「教育を協働する」実践についてポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各校及び参加者で互いの実践を交流します。

福井県立高志高等学校 福井県幼児教育支援センター
奈良女子大学附属中等学校 静岡県富士市立高等学校

Session II シンポジウム 14:20-15:50

〈シンポジスト〉 和歌山県立桐蔭中学校・桐蔭高等学校 校長 岸田 正幸 氏
長崎大学教育学部附属中学校 研究主任 鶴田 浩一 氏

〈コメンテーター〉 白梅学園大学 教授 無藤 隆 氏

〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院 特命助教 綾城初穂

「校種を超えた教育を協働する」というテーマについて、それぞれの実践やビジョンを語っていただきます。さらにコメンテーターを通して、参加の皆さんとともに実践の意義について考えていきます。(シンポジスト・コメンテーターの発表時間は約20分を予定)

Session III フォーラム 16:00-17:40

先の2つのsessionを受け、参加者が小グループに分かれ、それぞれの立場や背景を基盤として議論し、共有していきます。それぞれの参加者が、校種を超えたコミュニティや協働について日々、感じていることや悩んでいることについて、本音を交えてじっくりと語れる場にしたいと考えております。

Zone B 教師教育

21世紀の教師教育をイノベーションする:教職生活全体を通じた教員の資質・能力の育成ー育成指標は教員研修を変えられるのかー

Zone Bでは、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、“21世紀の教師教育をイノベーションする”をテーマとしています。

昨年12月に中央教育審議会から出された答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では、これからの時代の教員に求められる力として、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力などが挙げられています。そしてこのキャリアステージに応じた学びや成長を支えていくため、教員の養成・研修を計画・実施する際の基軸となる“育成指標”を教育委員会と教職大学院を含む大学等が協働して作成することや、教育委員会と大学等が相互に議論し、養成や研修の内容を調整するための制度として「教員育成協議会」（仮称）を創設することなどが提言されています。

また、教職大学院は、独立行政法人教員研修センターとも連携し、大学と教育委員会・学校との連携・協働のハブとなり、大学全体の教員養成の抜本的な強化や現職教員の研修への参画を図ること、独立行政法人教員研修センターは、教員の研修の充実のため、これまで以上に積極的に役割を果たしていく必要があることなども述べられています。

そこで、今回の Zone B では、「教職生活全体を通じた教員の資質・能力の育成ー育成指標は教員研修を変えられるのかー」と題し、学校、教育委員会や教育センター、教員研修センター、教職大学院等が教員の育成ビジョンを共有し、連携・協働しながら、教員育成指標、教員育成協議会（仮称）、教員研修計画等を構築する中で、高度専門職業人として学び合い、高め合う教員を育成・支援するため、それぞれがどのような役割を担い果たしていくべきなのか、参会者の皆様方と共に以下のセッションを進めながら考えていきたいと思えます。

Orientation 13:00-13:10

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

Session II シンポジウム 14:20-15:50

〈シンポジスト〉

文部科学省高等教育局長 常盤 豊 氏

独立行政法人教員研修センター理事長 高岡 信也 氏

横浜市立浦島小学校長 平本 正則 氏

福井県敦賀市教育長 上野 弘 氏

〈コーディネーター〉

福井大学教職大学院教授 松木 健一

Session III フォーラム 16:00-17:40

Session I, IIを受け、小グループに分かれて参会者の皆様方と議論を進めます。

Zone C 地域 学び合うコミュニティを培うー持続可能なコミュニティをコーディネートするー

これまで Zone C では、各地で取り組まれている長期に渡る実践の歩みとその展開を、地域・世代・領域を超え共有し検討し続けています。そして、ここ数年はコミュニティの発展における「持続性」をめぐる問題に焦点を当て、互いの実践から学び合っています。現在、私たちが地域や職場で出会う課題はある一つのアプローチで解決しえないものへとより複雑化・高度化しています。そのため、地域の発展を支える自治や学習においてもその持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われていると言えます。この問題意識と視点を引き継ぎながら、今回 Zone C は、C1「若者と地域」・C2「地域と学校」という互いに重なり合う2つのテーマを設定いたしました。

人口減少・移動の更なる進行によって、地域社会の存立そのものが危ぶまれるとともに、「地方創生」が重点課題としてクローズ・アップされてきました。そのような中、C1 では、あらためて新しい世代の主眼的な実践や地域活動に光をあてながら、その持続的な展開を支えるコーディネートの可能性と課題を考えていきたいと思えます。

また、昨年12月には「学校と地域の連携・協働」にかかわる課題整理と今後の包括的な方向性を提起する中央教育審議会答申が出されましたが、子どもたちの学びや成長を支えることで学校と地域がともに学び合うという実践は、各地で着実に積み重ねられてきています。C2では、そのような実践の長い歩みや新しい試みを交流し、その価値を互いにじっくりとふりかえりながら、子どもも大人も育ち合うコミュニティのこれからを考えていきたいと思えます。

C1 学び合うコミュニティを培うー若い世代と地域を結ぶー(福井駅前 AOSSA)

C1は、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR福井駅東口前のAOSSAが会場です。Session Iではフロアをまたぐ空間的な拡がりのなかにポスターを配置し実践交流を行います。Session IIでは、「持続可能なコミュニティをコーディネートするー若い世代と地域を結ぶー」と題しシンポジウムを行います。若い世代が主体的に活動を進め地域に参画していることの意味を確認しながら、新しい世代の活動をどのように支えていけるのか、また、それをどのようにコーディネートしていけるのかを各地の取り組み事例をもとに考えていきます。Session IIIでは、シンポジウムの問題提起を受け、6人程度の小グループを組み互いの取り組みを交流・共有していくクロスセッションを行います。多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

Orientation 13:00-13:10 AOSSA 6階(参加受付ブースあり)

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

Session II シンポジウム 14:20-15:50

〈シンポジスト〉 東京学芸大学 倉持 伸江 氏
福井県連合青年団 山田 絵美子 氏
〈コーディネーター〉 福井市教育委員会生涯学習室 吉岡 努
福井大学 半原 芳子

Session III フォーラム 16:00-17:40

C2 地域と学校はいかに学び合うのかー大人も子どもも育ち合うコミュニティへ(文京キャンパス)

ここでは地域と学校の関わりについて考えます。たとえば、地域に暮らす大人たちや子どもたちが持つさまざまな要求に対して、学校を担う教職員たちはどのように応じますか。あるいは、教職員たちは地域の子ども・大人に対する責任をどのように果たしますか。このような相互関係をひとまず想定したうえで、学校と地域の関わりをとらえ直そうとしている活動や、地域に暮らす大人たちと子どもたちとの結びつきを編み直す取り組みを共有します。

そして地域と学校が学び合うとはいかなる営みでしょうか。地域と学校に生きるすべての大人も子どもも育ち合う関係性はどのようにつくられるのでしょうか。このような問いにも立ち返りつつ、過去と未来の世代に対する責任を果たす地域と学校のあり様や、子どもと大人が学び合い育ち合う意味について、すべての参加者ととも考えましょう。

Orientation 13:00-13:10

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

Session II シンポジウム 14:20-15:50

〈シンポジスト〉 市立札幌大通高等学校 平野 淳也 氏
安居の里を守る会 重森 正雄 氏
〈コーディネーター〉 福井大学 富永 良史

Session III フォーラム 16:00-17:40

Zone D 授業研究

教師の資本を授業研究によっていかに培うのか:子どもと教師の学びを支えるために

教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続け、新しい時代の授業づくりへの意欲を高め維持していくために、そして、未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えるために、日本独自の学校文化・教師文化である授業研究に大きな期待が寄せられています。しかし、ただ授業研究を実施すれば教師の指導力や授業づくりへの意欲が向上するわけでもなく、また、子どもたちの学力や生活力が向上するわけでもありません。何のために授業研究を実施するのか、いかなる授業研究を実施するのか、どのように授業研究を実施するのか、私たちはこれらの問いを常にもちながら、確かな戦略をもって授業研究を実施することが必要になります。

そこでZone Dでは、「専門職の資本」*という考え方を提案させていただいた上で、「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」というテーマで各Sessionを進めていきます。未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えている実践者や研究者の方々、「専門職の資本」を磨きはじめた若い実践者の方々にご参会いただければと思います。

*「専門職の資本」は人的資本、社会関係資本、意思決定資本の3つからなり、これらは、教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続けていくために投資できる（磨いていける）ものです。Zone Dでは、授業研究の力を「専門職の資本」へ投資するという観点から、参会者の皆様と一緒に考えていきたいと思ひます。

Orientation 13:00-13:10

Session I ポスターセッション 13:10-14:10

Session II シンポジウム「子どもと教師の学びを支える福井の授業研究」 14:20-15:50

(シンポジスト)

福井市至民中学校教諭 竹林 史恵 氏

福井市中学校社会科授業研究会 森上 愛一郎 氏 ・ 松原 義之 氏

福井県教育庁義務教育課主任 船田 次郎 氏

坂井市立丸岡南中学校教諭 牧野 健次郎 氏

小浜市立雲浜小学校教諭 藤野 亮 氏

(コメンテーター)

東京大学大学院教授 秋田 喜代美 氏

(コーディネーター)

福井大学教職大学院准教授 木村 優

Session III フォーラム「子どもと教師の学びを支える授業研究の実践」 16:00-17:40

A. 学校における授業研究の多様性から学び合う

A-1 富山市立堀川小学校

福井大学教育地域科学部附属中学校

A-2 信州大学教育学部附属松本中学校 おおい町立名田庄小学校

B. 協働連携による授業研究

福井市中学校教育研究会・英語部会 福井大学美術科の特別支援学校

C. 高校における授業研究の発展

埼玉県立新座高校 福井県立若狭高校





実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions KEYNOTE SPEECH

「学び舎」として学校をリ・デザインする



ハリー・ダニエルズ氏

Prof. Harry Daniels オックスフォード大学教授
専門は教育学。主著に『ヴィゴツキーと教育学』（関西大学出版）『Vygotsky and Special Needs Education』（Continuum）『Activity Theory in Practice』（Routledge）など。ヴィゴツキー研究の第一人者で、特別支援教育や学校改革の分野で実践的にも活躍している。

コメンテータ



無藤 隆氏

Prof. Takashi Muto 白梅学園大学教授
専門は発達心理学・幼児教育。主著に『幼児教育のデザイン』（東京大学出版会）『現場と学問のふれあうところ』（新曜社）など。全国の学校・園への助成を行い、中央教育審議会の委員としても活躍している。

コーディネータ



岸野 麻衣氏

Dr. Mai Kishino 福井大学教職大学院准教授
専門は発達臨床心理学。主著に『0歳～12歳児の発達と学び』（北大路書房）『子育て支援の心理学』（有斐閣）など。様々な園・学校の実践研究に関わり、子どもや教師の発達を研究している。

平成 28 年

日時

2/27 (土) 9:40-11:20

場所

福井大学文京キャンパス
総合研究棟 V **メイン：大1講義室**
(教育系1号館) **サブ：大2・12講義室**

入場

無料 整理券配布

- ・ 英語→日本語の同時通訳を行います。
- ・ 同時通訳装置は入場先着 280 名まで貸与いたします。
- ・ 整理券のない方はサブ会場（中継会場）となります。

申込

実践研究福井ラウンドテーブルの詳細と申込については、12月初旬に福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> で公開予定です。

実践研究福井ラウンドテーブル (2/26-2/28)

2/26 (金) Pre-SESSION 17:30-18:40 教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

2/27 (土)

KEYNOTE SPEECH 9:40-11:20 「学び舎」として学校をリ・デザインする
STUDENTS' SESSION 11:30-12:30 生徒が語る「私たちの学校・学び・未来」
SESSION I 13:00-14:10 実践に学び合う広場 Knowledge fair
SESSION II 14:20-15:50 課題の提起 Symposiums
SESSION III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い Forums

2/28 (日) SESSION IV 8:20-14:00 ラウンドテーブル Round table cross sessions

※予定が変更になる可能性もあります。福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認の上お申し込みください。

実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Session 平成 28 年 2 月 27 日 (土)
Students' Poster Session

「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』のご案内(二次)」

平成 28 年 2 月末の実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions, 2 月 27 日 (土) Students' Poster Session 「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』」のご案内です。これから、21 世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

記

- 1 日時 平成 28 年 2 月 27 日 (土)
10:30-11:00 受付
11:30-12:30 Students' Poster Session
12:30-13:10 小学生「ランチ de こうりゅう」
中学生・高校生 昼食
13:10-14:10 小学生「きずなをつくる」
中学生・高校生「グローバル社会を体感する！」
14:20-16:00 中学生・高校生「夢 語ろう会」
- 2 会場 福井大学文京キャンパス アカデミーホール
- 3 参加費 無料
※自家用車での入構・駐車も無料です。
27 日午前中は大学正門ゲートに係員がおりますので直接お進みください。
午後は守衛所での手続きが必要な時間帯がございます。
- 4 準備物 発表物, 弁当, 飲み物 ※発表者のみ 発表用ポスター (A0 版を掲示可能です)
- 5 その他
お問い合わせは 福井大学教職大学院 准教授 木村 優 TEL/FAX 0776-27-9906
E-mail : u-kimura@u-fukui.ac.jp または, dpdtfukui@yahoo.co.jp までお願いいたします。

二宮先生の急逝の報に接して

柳沢 昌一

2 月 6 日朝。教職大学院の第 2 回の入試。来年度出発する学校改革マネジメントコースのはじめての入試でもあり、担当のスタッフは緊張の朝を迎えています。試験開始前後、保管していた金庫が開かないというトラブルで試験時間変更、および試験問題の再印刷の必要ありの電話が入り、いきなり緊急事態に巻き込まれることになりました。

そのあと、しばらくして、もう一つの連絡が入りました。二宮先生が救急車で病院に運ばれたとの近所の方からの連絡が、伊那に行っていた森さんを通じて入りました。その後、三田村先生と小林先生に、ご自宅を訪ねていただきましたが、ご家族には会うことができず、状況はつかめないままでした。夕方近くになって、ご家族ともようやく連絡が通じ、先生が亡くなっ

たことを確認しました。

少し前から先生が体調を崩されていることを心配していましたが、いきなりこのようなことにつながることは、思いもよらないことでした。このことを、どう受け止めるべきなのか。自問自答が続いています。

翌日。そうした状況の中で、一つの文章をまとめました。福井大学学長名の弔辞の草稿ですが、後半は、専攻長としての思いになっています。ニュースレターにおいて、二宮先生の追悼のための特集を準備することとなっていますが、それに先だって、今回、本号において、このことを取り急ぎお伝えする記事と掲載することとなり、この一文を集録いたします。

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻・教職大学院教授 二宮先生のご霊前に 謹んで哀悼の誠を捧げます
また ご遺族ご親族の皆様のお悲しみはいかばかりかと お察し申し上げ 衷心よりお悔やみ申し上げます

先生は 昭和五十五年四月より、春江町大石小学校、同春江中学校、福井市大東中学校において教諭として努められたのち、福井大学教育地域科学部附属中学校教諭として英語教育における単元開発の取り組みを進められました。続いて教育庁において指導主事・主任として教育行政の立場から学校を支えられた後、安居中学校教諭を経て、平成十七年より文殊小学校・木田小学校において教頭を務められました。平成二十三年より再び福井県教育庁義務教育課参事として教育行政の要職を務められた後、平成二十五年、福井大学教職大学院における専門職学習コミュニティ支援部門の教授に就任されました。

専門の英語教育については、先生は一貫して「生徒が主体的に学ぶ英語教育」、Communicative Language Teaching 教授法の推進と研究に力を注がれてきました。とりわけ附属中学校時代には、学びのプロセス、「生徒の主体性を生かす」授業の実現、さらにはプロジェクト学習に挑戦されています。そうした先生の英語教育に関する実践と研究は『中部地区英語教育学会紀要』や共著書としてまとめられています。またその長期にわたる実践と研究の歩みを、福井大学教職大学院年報『教師教育研究』にまとめられています。

教職大学院では、英語教育の実践、教育行政や管理職としての経験と知見を活かしながら、学校における教師の協働の実践と研究を支える役割を果たしてこられました。福井市至民中学校、美浜町立美浜中学校、そして福井県教育研究所をはじめ、いくつもの拠点校を担当され、現場での実践を支える役割を果たしてこられました。先生方に接する、二宮先生の姿勢は、その授業観にも根ざして、つねに先生方の主体性を重んじ、その取り組みに信頼を寄せ、見守り励ますものでした。長い実践経験と誠実で飾らないお人柄によって、学校・そして研究所の取り組みを支え励まし続けてこられました。

学部の運営に関わっても二宮先生は就職委員会や更新制講習委員会で、教職大学院を代表して中心的な役割を果たしてこられました。とりわけ更新制講習においては、実践の省察を軸とする福井大学の必修科目の運営の中心となり、その再構成の実務も進めて来られました。

教職大学院の運営に関わっては、福井県教育委員会と教職大学院の間の協力関係の軸となる運営協議会の組織運営を担当され、文字通り、教育行政と大学院を結ぶ要の役割を果たして来られました。長い教職経験・教育行政における実務経験を豊富にもたれた二宮先生が、教職大学院の取り組みの意義を深くとらえ、大学院と教育行政、そして学校とを結ぶ仕事を進めてきてくださったことは、本教職大学院の企図をどれだけ支え、また励ますものだったか、改めて強く感じております。

この春、先生が、再び学校に戻られ、自ら学校改革の陣頭に立たれること、そして、その立場に立った先生とその学校ともに、私たち教職大学院もまた、新しい段階へと進んでいくことを私たちは思い描いておりました。先生の突然のご逝去の報に接し、信じがたいという思いと痛恨の念は、やみません。二宮先生。ほんとうに、先生ともっと長く、いっしょに、新しい教育をつくる長いプロジェクトを歩んでいきたかった。教職大学院に関わるすべての者の思いです。

来年度には、小学校における英語教育、そして教職大学院の国際化、そしてマネジメントコースの取り組みも大きく進む時期に当たります。先生が、英語教育そして教職大学院で進められてきた仕事を引き継ぎ、確実に進めていきたいと、改めて考えております。そのことこそが、先生とともに歩み続けることでもあると思います。どうか、私たちの長いジグザグの道のりを、見守っててください。

先生 本当にありがとうございました やすらかにやすみください
合掌

Schedule

2/26-28 Fri-Sun 「実践研究福井ラウンドテーブル 2016 スプリングセッション」

3/23 Wed 学位伝達式

【編集後記】2016年2月6日 二宮先生が逝去されました。
逝去される一週間前コレポレーションホールでの集まりの後、窓から差し込むあたたかい日差しに「いい天気ですね」と問いかけたら、いつもの優しい笑顔で「ほやのう」と返してくれました。私にとってそれが先生との最後の言葉になりましたが、思い返せばいつも「ほやのう」と優しく受けとめてくださっていました。感謝は言い尽くせず、底の見えない悲しみの中にいます。(半原芳子)

教職大学院 Newsletter **No.80**

2016.2.13 内報版発行
2016.2.29 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtkufui@yahoo.co.jp